③ 河川名

矢部川水系

沖端川（おきのはたがわ）

特徴・アピールポイントなど

干潟環境に配慮した河道掘削を行いました。
城下町柳川の景観にも配慮した整備を行いました。

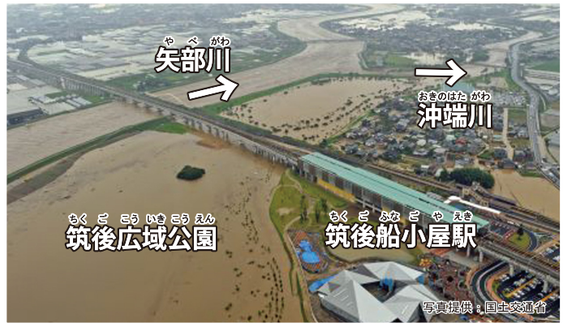
災害からの復旧で環境に配慮した事例

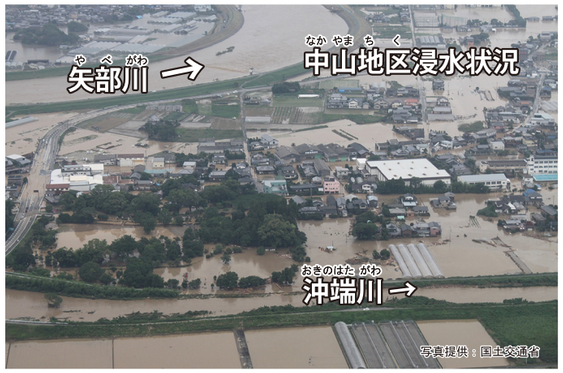
平成24年7月の九州北部豪雨により、広範囲にわたる浸水被害を受けた沖端川では、河川激甚災害対策特別緊急事業により平成24年から概ね5年間で整備されています。

沖端川の下流部は、有明海から広がる干潟環境により多くの生物が生息しており、河川の拡幅部の掘削形状を工夫し干潟環境を創出しました。また旧城下町を流れる区間においては、柳川市の景観区域に接しており、景観アドバイザーの意見を取り入れながら周辺の歴史・景観に配慮した堤防や橋梁の整備を行いました。

被害状況

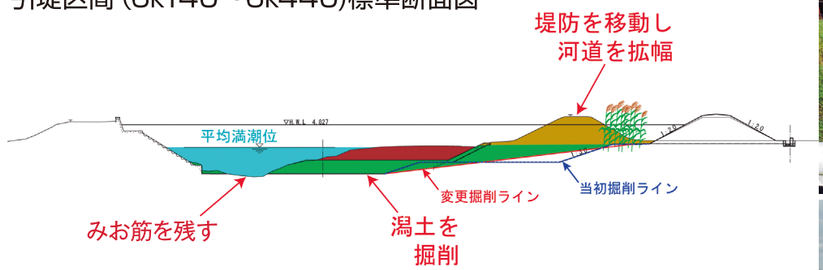
平成24年7月14日の梅雨前線豪雨は矢部川の船小屋水位観測所（国管理）において観測史上最高水位9.76mを記録し、はん濫危険水位8.4mを長時間にわたり越えました。その結果、矢部川においては六合地区（L=約50m）、沖端川においては中山地区（L=約150m）、本郷地区（L=約30m）の2カ所で堤防決壊が発生し、矢部川及び沖端川の沿川において2,579haが浸水し、1,808戸の家屋・事業所等に被害が及びました。





干潟の形成

引堤区間（6k140～6k440）標準断面図



専門家のアドバイスを受け、掘削ラインを変更
※地盤高によって生息する底生生物や植物が異なることから、堤防際から水際にかけ緩やかで長い斜面にすることにより、多様な種が自然回復的に生息可能な環境を創出。

出の橋の景観に配慮

出の橋は、江戸時代から重要な幹線道路であり、地元からもこの橋の重要性についての意見がありました。このため、地元から日常や祭りでの利用などについて意見を伺い、専門家の意見を取り入れながら、景観に配慮した橋の架け替え事業をすすめました。

●出の橋について

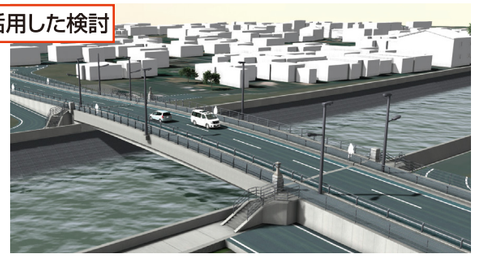
柳川城下への玄関口であった出の橋は、たもとに門と札所があるなど、歴史的に重要な橋でした。その後、大正9年に架け替えられてからも長い間地域のシンボルとして愛されていました。

●主な配慮事業

護岸端部の丸み

既存親柱の活用

CGを活用した検討



城下町周辺のパラペットは、端部に丸みをつけることで周辺景観になじませ、石燈籠の形状をした旧橋の親柱は、地域の強い要望により再利用しました。
更に、完成形のイメージを共有するため、CGを活用して完成イメージの共有を図りました。